

# Essay

Sapiarc.com

2018年8月16日(2018-2)

## 58年前の北海道旅行

今年2018年は、「北海道」という地名が命名されてから150周年になるそうだ。それまで北海道は「蝦夷地(エゾチ)」だった。150周年を記念する式典が8月5日に札幌で行われ、天皇皇后両陛下が出席された。それに先立ち、8月4日に両陛下は利尻島(リシリトウ)にも行かれた。今では利尻島にも空港があるので、札幌から空路で行かれたようだ。

58年前の1960年(昭和35年)8月に、私は北海道にはじめて行き、利尻島にも行った。当時、私は大学院修士課程2年の院生だった。この旅行の本来の目的は、北海道大学で開催された「分子構造討論会」に出席することだったが、そこで私が研究成果の発表をしたのかどうかなどということはすっかり忘れてしまっている。しかし、研究発表(当時はポスターでの発表はなく講演のみ)をしないのに、札幌まで行くことは考えられないので、研究発表もしたはずだ。

それから58年も経った今、私の記憶に残っているのは、東京から札幌まで鉄道と青函連絡船で行ったこと、討論会が終わってから北海道の各地を旅行したことだ。[当時、鉄道の名称は日本国有鉄道(略して国鉄、現在のJR)で、青函連絡船も国鉄の一部だった。]

上野駅で乗ったのは特急「はつかり」で、この列車についてはWikipediaにかなり詳しい説明がある。「はつかり」は「初雁」を意味しており、1958年(昭和33年)10月から運行が始まっていた。当初は常磐線から東北本線に移っていたが、あとで全部東北本線を走るようになった。私が乗ったのは、上野駅を12:20に出て、日付が変わった00:20に青森駅に着くものだった。当時、常磐線も東北本線も電化されていなかったもので、蒸気機関車で走った。したがって、速度が遅いうえにクーラーがないので、車内は暑く、窓を開けていた。トンネルに入るときには、窓を閉じなければならなかった。

青森駅に予定時刻より遅れて着いたので、乗るはずだった青函連絡船に乗れずに、次の船に乗ったりするゴタゴタがあったが、ともかく函館で函館本線の急行列車に乗った。急行とはいっても、今では考えられないぐらい遅く、上野駅を出てから24時間以上もかかって札幌駅に着いた。泊ったのは、国家公務員共済組合の宿舎だったと思うが、どういう部屋に入ったかは憶えていない。ビジネスホテルが各地にできはじめたのはずっと後のことで、当時は他に泊まる場所がなかった。格式の高い札幌グランドホテルはあったが、大学院生などが泊まる場所ではなかった。この年、札

幌は東京と変わらないぐらい暑かった。これにはガッカリした。

討論会の期間は3日間か4日間だったはずだ。当時は、ポジフィルムを紙枠など(マウント)に固定したスライドをプロジェクターで拡大して映写するという方法が未だなかった時代で、「模造紙」という大きな紙に、研究成果をマジックペンで手書きしたもの(これを「ビラ」と呼んでいた)を演壇上のビラ掛けに掲げて、説明をしていた。現在は、スライドの代わりにパソコンのPowerPointを使うのが普通になっている。

討論会の期間中、ずっと会場に出る必要はなかったようで、研究室の主宰者だった島内武彦(シマノウチ・タケヒコ)教授が、レンタカーで3人か4人の研究室員を小樽方面に連れて行き、よい場所にあったレストランでジンギスカン料理をご馳走してくださいました。本場ともいふべきところでジンギスカン料理を食べたことは、私のよい思い出になっている。島内先生は、64歳になる10日ほど前に、心筋梗塞で急逝された。それから既に38年が経っている。

討論会が終わってから、まず行ったのは旭川だった。観光バスで層雲峡(ソウウンキョウ)を走って、長くて美しい峡谷を見物した。バスガイドが「層雲峡という名は、大正時代の文豪大町桂月先生が付けられたものです」というようなことを言ったという記憶がある。この名は、アイヌ語の地名so-un-pet(滝一ある一川)の音に似せたものだと言われている。バスがどこまで行ったかは憶えていない。今では、層雲峡温泉街から[ロープウェイ](#)と[リフト](#)を乗り継いで大雪山のなかの黒岳の7合目まで行け、そこから1時間ほどで頂上に登ることができるそうだ。58年前には、ロープウェイはなかったと思う。

旭川から北海道の北端の稚内(ワッカナイ)に行き、そこから船で礼文島(レブントウ)と利尻島に行った。礼文島は利尻島の北にある。礼文島は南北に細長い形で、利尻島は丸い形だ。利尻島には利尻富士という形のよい山があるが、船から見ただけで、登りはしなかった。時間がなくて、どちらの島もよく見て回ることはできなかった。つまり、日本の最北にあるこれらの島に行ったというだけのことだったが、そこに行ってみたいという一種の「憧れ」を満足させることはできた。利尻島の船着き場の近くにあった旅館に泊まった。

翌日は荒天で、帰りの船は出ないだろうと思った。ところが出るということがわかって、慌てて乗船した。この船は多分200トンぐらいの小さなもので、揺れにゆれた。船室にいと、気分が悪くなりそうなので、甲板上で何かにつかまっていた。船に向かって横から押し寄せる波頭が目の高さよりずっと上にあるように見え、驚いてしまって、まったく船酔いはしなかった。2時間ほどで、稚内港の防波堤が見えてきたときには、本当にホッとした。

稚内から、北海道を北から南に縦断して、襟裳岬(エリモミサキ)に行った。鉄道は、今でも襟裳岬の近くまでは通じていない。一番近い鉄道の駅は日高本線の終点の様似(サマニ)で、そこから襟裳岬までは30kmほどある。稚内から様似まで一本の列車で行けたとは思えないので、どこかで乗り換えたのだろうが、どこで乗り換えたのかは憶えていない。途中のどこかで泊まりはしなかったので、夜行列車を利用したのだろう。様似から襟裳岬まではバスで行った。岬の突端に大型の灯台がある。濃霧が出やすいところなので、霧笛がある。私が灯台の側まで行ったとき、霧は出ていなかったのに、突然「ボー」という物凄く大き

---

な音を鳴らしたので、驚いたことを憶えている。

それから帯広(オビヒロ)に行ったが、これは多分バスで行った。この間の距離は約100 km あるのだが、帯広を通っている根室本線に乗るには、相当迂回しなければならない。したがって、バスで襟裳岬から海岸沿いに北上して、港町の広尾を経由して帯広に行ったのだろう。帯広で泊まったわけではなく、またバスで更に約30 km 北にある然別湖(シカリベツコ)に行った。利尻島などに行ったときには6人か7人一緒にいたが、このときには、2年先輩のI.S.さんと2人だけになっていた。

然別湖は北海道の真ん中より少し南にある比較的小さな湖だ。私がここに行きたかったのは、名前に惹かれたからだ。標高は810 mで、北海道の湖では最も高いところにある。したがって、私が行ったときにも涼しかった。湖畔に旅館が一軒だけあって、このときは空いていた。夕方、ボートで湖の真ん中にまで漕いで行った。あまり高くない山に囲まれていて、静かなところだった。他にボートは出ていなかった。

旅館の広い座敷で、くつろいで夕食を食べた。涼しいので、きちんと布団を敷いてもらって、ゆっくりと眠った。北海道に来て、はじめてのんびりした気分になれた。

道東の阿寒湖や摩周湖にも行って見たかったが、旅行期間が長くなり過ぎるので諦めた。翌日、根室本線の列車に乗って、札幌を経由して、来たときと逆のルートをとって、本州に向かった。大きな青函連絡船は少しも揺れなかった。(おわり)